

3. 皆生温泉泉源守 ものがたり

< 皆生温泉泉源守 >

- ・ 大正 13 年 3 月皆生温泉では三号泉の開発に成功した。皆生温泉では、開業当初から温泉会社が泉源を開発・管理して、各旅館まで温泉を送り届ける役割を担っていた。
- ・ 三号泉の開発により、複数の泉源から温泉を集めてお湯を送り出す施設が必要となった。このために作られたのが温泉配給所である。
- ☑ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50 年のあゆみ」
 - ✓ 大正 13 年 9 月三条通りの突き当たり、海岸通との内側コーナーに二階建ての配給用貯湯タンクが完成した。高さ 10m、建坪 7 坪半の直方体のコンクリート建築で、二階部分が容量 2 百万石の大貯湯槽となり、一階が機械室にあてられた。
 - ✓ このタンクの南側に続けて看守宅が建てられ、後にそこは売店となった。
- ・ まさに、この配給用貯湯タンクと看守宅（以下、伝承者たちの呼称である「源泉ポンプ小屋」と言う）が源泉守ものがたりの舞台となる。

= 第一代泉源守 藤田幸太郎 =

- ・ 第一代目の泉源守は、藤田幸太郎氏である。幸太郎さんは、有本松太郎さんと同郷の兵庫県浜坂の出身である。妻である「ゑつ」さんは、有本松太郎さんの親戚にあたる。
- ・ 皆生温泉に来る前、幸太郎さんは神戸の造船会社に勤務しており、夫婦は神戸に住んでいた。大正 10 年頃、一号泉の開発に成功し、その温泉を汲み上げるために発動機を設置したが、発動機を動かすために免許を持った人が必要であった。そこで、有本松太郎さんが藤田夫妻を皆生の地に呼び寄せ、発動機の管理を幸太郎さんに任せた。
- ・ 幸太郎さんとゑつさんの長男で、皆生温泉でたばこと土産物店を営む藤田収康さんが当時の様子を語る。

☑ 伝承者 藤田収康氏：

- ✓ 大正 11 年頃に両親は皆生温泉へとやってきた。
- ✓ 大正 13 年 9 月源泉ポンプ小屋が完成すると、両親は住み込みで管理にあたった。その後 1~2 年後に源泉ポンプ小屋の住居部分を改造して土産店をはじめたという。



昭和初期の源泉ポンプ小屋
 右手奥：幸太郎氏 その手前：ゑつ氏
 写真提供 藤田収康氏

- ・ 昭和初年頃、藤田夫婦がはじめた土産物店が、現在も皆生温泉で営業を続けている藤田商店の始まりである。伝承者藤田収康氏は、昭和 8 年生まれであり、源泉ポンプ小屋で生活したことをあまり覚えていないという。両親から聞いた話によると。

☑ 伝承者 藤田収康氏：

- ✓ 冬になり海が荒れると、発動機が故障する。お客様がいるのにお湯が出なくなるので旅館から叱られた。また、冬になると温泉が上がらないこともあった。
- ✓ 配管の管理なども全て行っており、今でいうと水道工事業業者のような仕事もしていた。今のように配管の材質も良くないので、塩泉のため鉄がさびてお湯漏れなども頻繁に起こった。皆生中をあっちに行ったり、こっちに行ったりして、土を掘り返してパイプをつないだという。

- ・ その頃から皆生温泉の道路の下に配湯するためのパイプが張り巡らしてあった(現在でも道路の下に配管が通っている)藤田収康氏が子どもの頃は、道が舗装してなく砂利道であり、雪が降ると温泉の通るパイプの上だけ温泉の熱で雪が積もらなかった、その道を学校に向かって歩いていったそうだ。
- ・ 泉源の管理は、とにかく大変な仕事であった。幸太郎氏は、重労働のため足が悪くなり泉源の管理を続けることができなかった。そのため泉源の管理を二代目の岡本氏へと仕事を引き継いだ。現在、藤田商店がある場所に引っ越し、土産物店に専念することになった。

<戦前の皆生温泉>

- ・ 4才ぐらいまで泉源ポンプ小屋で暮らした伝承者は、当時を振り返る。

☑ 伝承者 藤田収康氏：

- ✓ 子どものころは砂浜がまだまだあった。
- ✓ ポンプ小屋から薬師堂まで 100m位の距離があり、波打ち際まではまだかなりの距離があった。夏になると、砂浜が熱くなるので海岸まで裸足では行けなかった。

- ・ 冬になると砂浜がドンドンとられていった。御来屋の方から大きな石を運んできて防波堤にしていた。昭和 15 年頃海岸沿いの旅館が脅かされていた時、波にえぐられ壁などが落ちて流されるのを見た覚えがあると語る。

- ・ 昭和 11 年頃藤田幸太郎さんは、皆生温泉の三条通りに土産物店を構えた。当時、戦時色が強くなってきており生活は厳しかったようである。

☑ 伝承者 藤田収康氏：

- ✓ 昭和 12 年陸軍の転地療養所が皆生に置かれた。各旅館に傷病兵が泊まるようになり、皆生温泉の旅館が潤った。
- ✓ 一方、土産物屋の方は、配給制になり売るものもなく、お客様もいなかった。お母さんは傷病兵で賑わう旅館の手伝いに出ており、お父さんも米子へ勤めに出ていて、お店の方は開店休業の状態であった。

- ・ そのころ小学生であった藤田収康氏は、旅館で療養をする傷病兵と釣りをしたり、写真を撮ってもらったりして遊んだという。

<戦後の皆生温泉>

- ・ 皆生温泉の創生期を支えてきた藤田幸太郎氏は昭和 28 年に他界された。
- ・ 折しも日本は高度経済成長に向かう上り坂にいた。このころ皆生温泉でも、白扇、松露園、ひさご家など多くの旅館が開業している。幸太郎氏の長男である収康氏は、父親の後を引き継いで藤田商店を営することとなった。
- ・ 昭和 34 年ヘルスランドが開業すると皆生温泉にお客様がどっと押し寄せてきた。当時の皆生温泉は、旅館街の中にまで定期バスが入っていた。皆生通りから四条通りに入り、吐月堂の前に四条のバス停があった。そして三条通りの方に回り込み、藤田商店の前に三条のバス停があった。
- ・ ヘルスランドを利用するお客様はすべて藤田商店の前のバス停で降りた。

☑ 伝承者 藤田収康氏：

- ✓ ヘルスランドが出来てから商売が繁盛してきた。夏時分になるとアイスクリームを売っていたが、30～40本ずつ運んでくるのだが運ぶのが間に合わないぐらいのスピードで売れていった。
- ✓ 当時は、生姜煎餅やボウフウ煎餅などを売っていたと思う。吐月堂で作っていた饅頭も売っていたと思う。とにかく何を置いても売れたことを覚えている。



戦後の三条通り 藤田商店
写真提供 藤田収康氏

- ・ 藤田氏は昔を振り返り、両親の世代は大変な苦勞をして皆生温泉を作り上げてきた。皆生温泉が良くなる前にこの世を去ってしまった。せめてお客様であふれる皆生温泉を見せてやりたかったと語る。

= 第二代泉源守 岡本与一 =

- ・ 藤田幸太郎氏から温泉配給タンクの管理を引き継いだのが岡本与一氏である。岡本氏がいつ頃まで源泉の管理をされていたか定かではない。
- ・ その後、三代目の森野政喜氏により源泉の管理が引き継がれている。

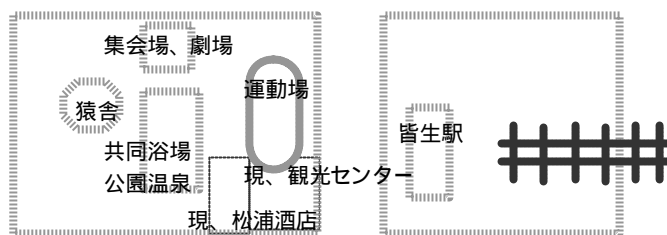
<皆生の温泉公園>

- ・ 岡本氏は源泉の管理をする傍ら、「公園温泉」の管理も任されていたようである。この「公園温泉」のあった公園（温泉公園）が当時の皆生の人々にとっては、ちょっとした自慢であったようだ。
- ・ 皆生でお菓子の製造販売をしていた内田氏によると。

☑ 伝承者 内田政雄氏：

- ✓ 温泉公園には、岡本さんが経営していた共同浴場があった。集会場みたいな建物がありそこでは映画が上映されていた。猿の檻や遊具などもあったと思う。

- ✓ 昭和 4~5 年頃、現在の観光センターのあたりに運動場があり、大人たちがユニホームをそろえて野球をしていた。旅館の旦那さんや検番の人たちであったのであろう。当時としては、とてもハイカラな感じであったという。



☑ 伝承者：松浦茂

- ✓ 温泉公園には、猿の檻があった。木馬やブランコなどの遊具があり、学校から帰ってきてよく遊んだ。何も無い時代であったので一番の楽しみであった。

< 公衆浴場公園温泉 >

- ・ 「公園温泉」は、戦後営業を一時中断していた。昭和 30 年 12 月岡本氏は、公園の三条通りを挟んだ東側で「公衆浴場公園温泉」の営業を再開した。大正時代に建てられた「公園温泉」の二階部分を移築して建てられたものであったという。
- ・ その後、昭和 60 年頃まで営業を続け、皆生温泉の人たちを癒す場として愛され続けた。

< 皆生温泉の足 >

- ・ 岡本氏が、戦後しばらく皆生温泉と米子駅の間を結ぶ足として、貸し切り馬車を運行していた。

☑ 伝承者 藤田収康氏：

- ✓ 戦後、石油が不足しており皆生 米子間には木炭バスが走っていたが、便数も少なく大変不便であった。少しの間であったと思うが、公衆浴場の岡本さんが貸し切りの馬車を走らせておられた。
- ・ 当時の写真を見せてもらおうと、グラウンドの東側に「貸切馬車」文字が写っている。バスも不便でタクシーもない時代に、お客様の足として馬車が活躍していたようである。
- ・ また、この時期にお客様を乗せる自転車が走っていた。コウセイ社の村川さんという方がやっていたようであるが、今でも中国や東南アジアなどで見られるような自転車にお客様を乗せて運ぶようなスタイルであったという。

= 第三代泉源守 森野政喜 =

- ・ 森野政喜氏は、九州の熊本県出身であった。坂内義雄氏の戦友であった関係で、昭和 12~13 年頃家族で熊本から皆生温泉の地にやってきた。
- ・ 森野政喜氏の息子で後を引き継ぎ皆生温泉の泉源を守り続けた森野寿夫氏によると。

☑ 伝承者 森野寿夫氏：

- ✓ 坂内さんの関係で皆生温泉に来て温泉の管理をするようになった。
- ✓ 初めは源泉ポンプ小屋では生活していなかった。藤田さん、岡本さんの後を引き継いで温泉配給タンクの管理を任された。

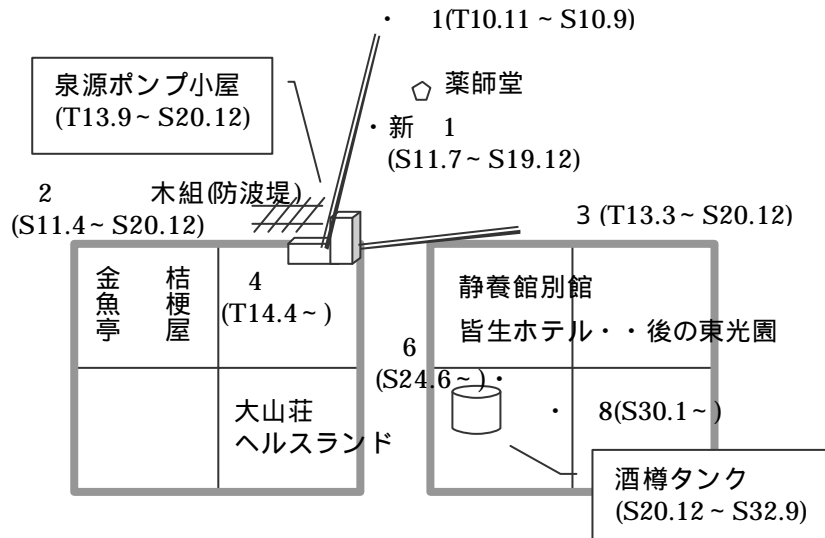
- ・ パイプの修理は時を選ばず、正月返上で修理をした。当時鉄のパイプを利用していたため、錆がでて傷みが激しかった。修理するにも、ボルトがさびて修理できない状況であった。当時は時間給等であり夜に作業していた。温泉に関しては森野政喜氏と、当時役員であった木村氏が一手に引き受けており、手が足りないときは、地元の人に人夫を頼んでいた。そのころは、旅館も協力的であり炊き出しなどをしてくれていたようだ。
- ・ 資材などが足りないときの応急修理として、配管に昆布を巻いたりした。昆布にお湯がしみるとヌメリがでてきて漏湯が止まるのだという。

< 源泉ポンプ小屋 >

- ・ 大正 13 年 9 月にできた源泉ポンプ小屋は、三代の泉源守とその家族によって支えられてきた。海辺にそびえ立つ三階建ての建物で、当時としては大変目立っていたのではないだろうか。海から湧きだしてくる温泉をタンクに集め各旅館に配る重要な役割を果たしてきた。いわば、皆生温泉の心臓的な役割を担っていた。
- ・ そこには多くの思い出があるようである。

☑ 伝承者 藤田収康氏：

- ✓ 昭和 11 年頃までこのポンプ小屋に住んでいたが、3~4 才ぐらいであったため当時の記憶はない。小学校の頃（昭和 17~19 年）遊びに行ったことは覚えている。
 - ✓ その頃は森野さんがポンプ小屋の番をしておられたと思う。
 - ✓ 学校から帰って屋上で遊んでいた。三階建ての建物の屋上で手すりもなかった。とにかく怖かったことを覚えている。
- ・ 戦時中、海水浴をしていて、ポンプ小屋の先の海岸を掘ると暖かい水がでてきた。寒いときは、暖かい砂をかけて砂風呂などをしていた。壊れた泉源から温泉が漏れていたのかもしれないという。
 - ・ ポンプ小屋には源泉管理のための地下室があった。その地下室から 3 号線までトンネルがあり、その中を通して遊んだものであった。現在でもなぎさ園の沖合に見えることがあるという。



< 源泉ポンプ小屋倒壊 >

- ・ 昭和 15 年には岩佐旅館など海辺の旅館が流出の危機にさらされ、昭和 17 年にはついに海岸旅館の金魚亭の一部が流出した。徐々に海岸の浸食が進み、タンクは瀕死の状況にあった。森野氏の家族も以前はタンク小屋に暮らしていたが、その頃には危険となったため他で暮らしていたという。
- ☑ 伝承者 森野寿夫氏：
 - ✓ タンク小屋で生活している頃は、冬になると小屋の中まで波が入ってくることも多かった。ひどいときには一日に 4~5m 浜が取られてこともあった
 - ✓ 夏になると浜が 50m ぐらい復活していた。
- ・ ポンプ小屋の沖には木組みの防波堤が作っており、石などを入れて波を防いでいたが、ついにその時がやってきた。
- ☑ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50 年のあゆみ」
 - ✓ 昭和 20 年 12 月 18 の海嘯は、ついに温泉供給の心臓部ともいえる配給タンクを倒壊させた。
 - ✓ 大正 13 年来源泉から汲み上げられた温泉を貯め、その高さで加圧して各需要家に送っていたもので、当時は二（新）、三、及び四号の各泉源が汲み上げられていた。その巨体は皆生温泉の象徴でもあったが、自然の力の前にあえなく跪いた。
- ・ この温泉配給タンクの倒壊により皆生温泉の送湯機能は一時完全に麻痺してしまった。
- ☑ 伝承者 手島孝氏：
 - ✓ 源泉を守るために木村勝三郎さんが先頭に立って海に飛び込み復旧に当たった。
 - ✓ 自分も海に入り、海中ではずれてしまっているパイプを必死でつないだ。
- ・ 当時、温泉会社の従業員であった手島氏、源泉の管理をしていた森野政喜氏、当時まだ入社していなかった森野寿夫氏なども海の中に入り温泉の復旧に勤めた。この時 4 号泉だけが掘り返され、代用の貯湯タンクにより細々と送湯が再開された。
- ・ しかし、不眠不休の作業で過労がたたリ、森野政喜氏がその後間もなく他界されたという。森野政喜氏の息子で当時 17 才であった森野寿夫氏は、当時を振り返る。
- ☑ 伝承者 森野寿夫氏：
 - ✓ 源泉ポンプ小屋が海に取られる時は、とにかく夢中で手伝っていた。
 - ✓ 皆生温泉の思いでは、初めから苦しいことばかりであった。
- ・ 森野寿夫氏は、その 4 年後の昭和 24 年に温泉会社に入社することとなる。そして平成 10 年で退職するまでの約 50 年間にわたり皆生温泉の湯を守り続けた。
- ・ 森野寿夫氏に仕事をしていて一番楽しかったことはと問うと。
- ☑ 伝承者 森野寿夫氏：
 - ✓ 昭和 24 年に六号泉が出たときはとにかく嬉しかった。
 - ✓ それまで温泉が足りないと、毎日毎日旅館から苦情をもらっていたが、これでやっと旅館から苦情を聞かなくてすむと思った。

< 6号泉と酒樽タンク >

- ・ 源泉ポンプ小屋倒壊の後、数年間皆生温泉は、波打ち際からわき上がる四号泉のみで温泉配給を続けていた。海の影響を受けない内陸に泉源を持つことが悲願であったが、掘削の失敗などが続きなかなか実現しなかった。
- ・ 昭和24年現在のなぎさ園の南側に、内陸では初めてとなる優秀な6号泉を掘り当てた。
- ☑ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50年のあゆみ」
 - ✓ 昭和24年6月26日午後8時は、まさに記念すべき皆生温泉復活の時であった。
 - ✓ 滾々と湧き出る高温の湯を目の当たりに見て、関係者一同には筆舌に尽くせぬ喜びがあったであろう。
- ・ 自噴する六号泉を前にした男たちが誇らしげに写真に写っている。
- ・ 六号泉という優秀な泉源を確保したものの、送湯の設備はまだ整ってはいなかった。戦後間もない時であり、物資がなく温泉を貯めるタンクを作ることができなかった。そこで思いついたのが、大きな酒樽をタンク代わりに使うことであった。
- ・ 昭和24年11月地上6～7mに設置された二つの酒樽タンクが完成した
- ☑ 伝承者 森野寿夫氏：
 - ✓ 酒樽をタンクにする発想は手島さんが思いついた。木村専務が懇意にしていた御車の深田酒造から、酒樽をもらい急ごしらえのタンクを作った。

< 海との闘い >

- ・ 内陸に泉源が確保され、泉源が海の脅威にさらられることはなくなったが、皆生温泉と海の戦いが終わったわけではなかった。
- ・ 昭和28年旅館の営業を再開した清風荘であったが、常に海の脅威にさらされていた。
- ☑ 伝承者 岩佐甲子郎氏：
 - ✓ 昭和30年海が旅館の前まで迫ってきた。塀がぐらぐらになってもうダメかと思った。米俵に砂を詰めて土嚢がわりにして急場をしのいだ。米子市と交渉を続けていたが、一刻の猶予も許されぬ状況となり鳥取県に直談判したという。
- ・ 岩佐氏は、京都や東京の大学で学者を目指して長年研究をしていた。そこで培った人脈があり話はトントン拍子に進むこととなった。
- ・ 昭和31年10月1日応急工事代金として250万円の予算が付き、早速災害復旧工事に取りかかった。その日のことは今でも忘れずに覚えているという。
- ・ その年の11月に200万円の予算が付き、四条通りから清風荘にかけての海岸線に護岸防潮堤が着いた。その後、昭和36年までの間に、日野川の河口付近から現在のオーシャン付近までの約1,300mに及ぶ防潮堤が完成した。
- ・ 時は前後するが、昭和22年皆生海岸の浸食が進む中、鳥取県の事業として護岸工事が実施されている。海岸線から沖に向かい14基の突堤を造った。当初は、豆腐状のブロックを積み重ねたものであったが、砂地のため海に沈んでしまった。そこで、ブロックをコンクリートでかためて一定の効果は上がったが、結局突堤全体が海に沈んでしまった。現在でも海浜公園沖の海岸などにその面影を見ることができる。

< 皆生の救世主テトラポット >

- ・ 護岸防潮堤が完成した後も、暴風雨の波浪は防潮堤を乗り越えて、皆生温泉の温泉街にまで押し寄せた。
- ☑ 伝承者 藤田収康氏：
 - ✓ 波が店の前まで押し寄せてくることもあった。
 - ✓ 津波のように引く力がなく、なかなか海水が引かなかった。また、台風などの後には朝起きて道にでてみると海水が残っているようなこともあった。
- ・ このような状況を打開しようと、建設省によって考案されたのが離岸防潮堤である。現在でも、遊歩道の防波堤から約 100m沖に海岸線に平行して敷設されているのがその離岸堤である。4 本足のコンクリートの固まりであるテトラポットを積み重ねて作られた。沖に置かれた離岸堤の内側に砂浜がよみがえるトンボ口現象という効果も実験で実証されていた。昭和 46 年 8 月第一基目が清風荘の沖に敷設され、同年の 11 月頃にはすでに離岸堤の内側にトンボ口現象が現れたという。
- ☑ 伝承者 森野寿夫氏：
 - ✓ テトラポットは皆生温泉の救世主であった。
 - ✓ 今の皆生の人には海の怖さを知らない。大きな波が来ると河口の方でテトラポットが壊れることもあった。テトラポットが悪者のような言い方をするが、決してそうではない。もしもテトラポットがなければ今頃皆生温泉は存在していなかったはずだ。
- ・ 市議会議員として皆生の振興に尽くしてきた間瀬氏によると。
- ☑ 伝承者 間瀬庄作氏：
 - ✓ テトラポットの設置には、建設省の技官野坂氏など多くの人たちの一方ならない努力があって成し遂げられたものである。その功績を称えて野坂氏の碑が松月旅館の前に立てられている。
 - ✓ 救世主の出現で皆生温泉の浸食の歴史は終わった。テトラポットの出現は皆生温泉の大きなポイントであり、建設省には足を向けて寝られない。
- ・ このテトラポットの出現により明治時代に皆生温泉が開湯して以来、数十年続いてきた海との戦いに終止符が打たれた。振り返ってみると皆生温泉の開発の歴史は海との戦いの歴史ともいえる。八幡市次郎氏が手がけ、有本松太郎氏に引き継がれた温泉開発は、その後坂内氏がその意志を引き継いでいった。
- ・ 三代の泉源守をはじめ、現場で働く多くの人々やそれを支えた住民や行政の力によって今の皆生温泉ができあがったのである。